

2022年12月の総評に代えて

○ 林 桂 ○

● 長谷川 柊 香 ● (宮城県 23 歳)

カーテンは帆だ月光に膨らんで

【評】青春俳句と呼んでいいものだろう。巧拙を問わず(作者は巧者だが)、若書きを持てることは幸せだろう。いつまでも書ける訳ではない。書けるときに書いておくべきだ。最も魅力的な作品群が若書きだったということも希ではない。「帆」も青春のシンボルの一つだろう。「十反帆浜に敷き縫ふ春日かな」(岡本癖三酔)「炎天の遠き帆やわがこころの帆」(山口誓子)。

● まちりこ ● (埼玉県 47 歳)

吹きつける風
真っ黒な空

母をひとり残して働きに出る

【評】「真っ黒な空」だから、夜勤に出るのだろう。「藪入りの悲し子一人母一人」

(内藤 鳴雪)。母一人子一人ゆえに幼く親元を離れなければならない子どもは昔からいただろう。

● 松下 誠一 ● (東京都 20 歳)

隣人はおかずを作りすぎることでなくまた僕もなく日の暮れて

【評】独身者のアパートが思い浮かぶ。おかずを作りすぎることでない生活とは、自身の食分だけを、その都度買ってくればよい生活だろう。隣人の台所を見た訳ではないだろう。しかし、自分と同じような生活スタイルから、容易に同じような食生活は想像がつくのである。

● 豊富 瑞歩 ● (茨城県 20 歳)

風呂上がりに踊るなどして
人生を楽しくする沢山の試み

【評】「沢山の試み」は、またどの試みも「人生を楽しくする」ことに容易に辿り着けない謂でもあろう。

● 植村 日向 ● (愛知県 22 歳)

空腹で寒いので本を見に来た
足の裏がすこしあたたまる

【評】「本を見に来た」場所は、図書館などを思い浮かべるべきだろうか。あるいは、これが深夜の時間帯ならば、コンビニかもしれない。空腹で体が寒いというのは切ない。確かに寒くなる。空腹ならば食べればよいだけのことだが、その代償行為が読書であることもまた切ない。「足の裏が少しあたたまる」は救済となっているのかどうか。

● 小沢 旭 ●（山梨県 21 歳）

閉じたドア映る俺はニット帽を
思ったより、目深に被っていた。

【評】街中で、思わぬところに鏡があって突然自分の姿に遭遇すると、なんとも言われぬ気持ちになることがある。作者がドアに映った姿はより強い印象を与えたに違いない。硝子が鏡になるには外は夜闇に満たされているということだろう。帰りがけに思わず見せられた自分の姿に突然の悲しみが襲う。

● 奎いう子 ●（佐賀県 38 歳）

メルカトル図法のロシア去年今年

【評】私たちに一番馴染みが深いのは、メルカトル図法で描かれた世界地図である。小学校の教室には掲げられていた。広大な国土のロシアは、メルカトル図法では、更に広大に描かれる。そして、私たちの印象は、このメルカトル図法のロシアである。ロシアのウクライナ侵攻から、年越しを迎えることとなった。改めてメルカトル図法で描かれたロシアの広大さを思う。

● 田崎森太 ●（東京都 71 歳）

冬銀河おおかみのゆめひとのゆめ

【評】「真神」「大神」である日本狼は絶滅したとされる。主体が滅んで夢だけが残るということはない。人の夢如何に。「絶滅のかの狼を連れ歩く」（三橋敏雄）「おおかみに螢が一つ付いていた」（金子兜太）。取りあえず、狼は人の夢の中には残っている。

● im ●（沖縄県 21 歳）

ゆきふる
ろうそく
のとけた
におい

【評】聖夜のようなでもあるし、民話の雪の一夜のようなでもある。多行の平仮名で書かれた作品世界のなかに、ゆったりとした美しい時間が流れている。

●マズルカ●（山口県 20歳）

ありふれた冬に
そのまま埋めとして
幼いわたしの
風邪の日の午後

【評】個人的に長く印象に残り、おりある毎に甦る場面は、他者には何でもないこともあるだろう。幼い冬のある日、風邪に伏せっていた記憶が残る。たった一人だという心細さの原点の記憶だろうか。

●小井 詩文●（京都府 24歳）

ぼくらは部分的真実を生きている

【評】たしかに私たちは、常に何事かの部分しか知らず、また部分しか生きられない。そこでの「真実」とはどれほど絶対的なものなのだろうか。

● 日下部 友奏 ●（群馬県 17 歳）

地毛証明書書き終えて虎落笛

【評】高校の生徒指導では、髪を染めることやパーマをあてることを禁止することが一般的だ。しかし、誰もストレートの黒髪という訳ではない。個性がある。この「ストレートの黒髪」の範疇に見えない生徒に、それがパーマや染色ではなく「地毛」であることを証明する文書の提出が求められる。その怒りにも似た複雑な気持ちを持ちを「虎落笛」に込めている。

● 手塚桃伊 ●（東京都 22 歳）

予測変換が忘れてくれない

【評】検索サイトなどは、一度入力をした言葉を予測変換して示してくれる。すっかり忘れたような言葉の変換も残っている。便利だが、殊更変換をして欲しくない言葉もある。突然突きつけられる過去

の記憶に戸惑う。

●みのり●（神奈川県 21歳）

石鹼の箱に描かれている牛の
子牛の頃を誰も知らない

【評】描かれた「牛」には、その子牛の時代も、またそれ以後も存在しない。また、誰も思いを馳せたりしない。しかし、子牛ばかりでなく、それが目の前にいる人であっても事情はあまり変わらない。私たちはそんな世界の中にいる。